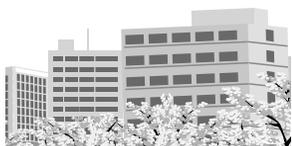


## 会員の広場



### 現実主義の陥穽

瀧口 勝行（東京）

国際情勢の緊張を背景に、わが国でも軍備増強を是とする風潮が高まっている。そんな中で非戦や平和を唱えようと、それは「現実的でない」とか「単純な理想主義だ」といった言葉を用いて批難される。また、核抑止体制の中にいる日本が核兵器禁止条約に加わることは、国際関係の実態を知らない「非現実

的」な選択だとされる。こうした論議の土台にある「現実」とは一体何なのだろうか、そして、いわゆる現実主義者が立脚する現実とは、本当の現実なのだろうか。

丸山真男は、戦後の再軍備論争をめぐる論考『「現実」主義の陥穽』で、日本人が「現実」や「非現実」という言葉を用いる時、無意識に前提としていること、そして無意識に見落としていることを鋭く剔抉してみせた。

その第一は、「現実の所与性」である。現実とは、一面では与えられたものであり、他面では日々新たにつくられてゆくものであるが、わが国ではもっぱら前者のみが現実であり、いいかえれば、現実とは端的に「既成事実」と等値され、「現実的たれ」とは、「既成事実

屈服せよ」ということに外ならない。

第二は「現実の一次元性」である。現実とは、本来様々な要素によって立体的に構成されているものだが、実際には現実の一面だけが取り上げられ、それが強調される。人が「現実的」というとき、相矛盾する要素をも含む複合的な現実のうち、自分の望ましいと思うものだけを切り取り、他の面は望ましくないと、とする価値判断に立っているのであり、「現実 vs. 非現実」の対立は、実際は価値選択の対立なのだ、という指摘である。

そして日本人が現実感を構成する第三の契機は、その時々々の支配権力が選択する方向がすぐれて「現実的」であるとされ、これに反対するものは、容易に「非現実的」というレ

ッテルを貼られる、というものである。

十年前「バズーカ」と称された新たな金融政策は、日本経済の停滞を示す多くの指標の中から物価の下落という現象だけを選び取り、単純な貨幣数量説に結びつけて生まれた政策である。そして「デフレの克服こそが日本経済の課題」というスローガンとともにひとつの物語 (narrative) に仕立てあげられると、それは瞬く間に社会を席卷し、唯一の「現実的」政策ともてはやされた。

ノーベル賞経済学者ロバート・シラーは、その『Narrative Economics』の中で、物語化した現実が、経済に強いバイアスを与えることを警告した。物語に化けた現実とは、時に社会的幻想を生む、危険な第四の現実である。